

慶應義塾大学学術情報リポジトリ  
Keio Associated Repository of Academic resources

Title	ヴァレリーと時間
Sub Title	Valéry et le temps
Author	田上, 竜也(Tagami, Tatsuya)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2007
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature Françaises). No.44 (2007. 3) ,p.49- 65
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20070331-0049">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20070331-0049</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# ヴァレリーと時間

田上 竜也

「おそらくはもっとも重要な——ともかくもっとも難解な〔意識の〕特性とは時間である」(C.int., III, 269)とポール・ヴァレリーは初期の『カイエ』に書いている。時間は彼が心的事象を認識する際、「空間」とともに依拠する大枠であり、またそれ自体最頻出の分析対象のひとつでもある。だがその主題としての重要性は認知されながらも、いまだかつて本格的な研究は、管見にふれるかぎりごく少数しかない<sup>1)</sup>。その理由としては、なにより彼が時間を扱う切り口や内容があまりに多岐にわたり、一義的な描像が得づらいという点が挙げられるだろう。ヴァレリーの時間論は浩瀚な『カイエ』全巻を通じて展開されており、そのほかに覚書や手書きおよびタイプ打ちのルーブリーフ草稿も残されている<sup>2)</sup>。この稿は、『カイエ』および関連草稿全体を通覧したうえで、現れる諸問題を整理し、基本的な見取り図を描くことを目的とする。

## 時間と自家変動性

最初期の歩みを振り返りながら、1900年の『カイエ』にはこう書かれる。「ここ数年、私は言語と時間を考究した。より一般的には表記法と操作とを」(C.int., III, 354)。周知のごとく、『カイエ』の探求を貫くヴァレリーの基本的態度は、哲学的思弁の重層を排斥しつつ純粋な心理的観察から出発し、その表象に際しては現実に即した概念や用語法を求めることにある。したがって彼が時間という語を使用する場合は、あくまで具体的事象を包含する一般的総称としての役割に限定し、極力それを観察から導かれた個別の機能的・形式的表現によって代替することを目指す。「時間とは、われわれが直接的

な心身領域において観察ないし受容する [……] 置換や緊張、分解の諸関係の一種の一般化である」(C, XII, 87)。「時間とは不純で悪しき概念である。むしろより広範囲にわたる諸概念の総体を扱うべきだろう。すなわち継起、保存、変質、知覚の一致ないし統一性を」(C, XVII, 744)。

心的「操作」の諸相に還元されるにせよ、意識が時間構造を持つことについては、ヴァレリーは当初から明瞭に認識していた。意識の置換を主たる観察材料とする以上、時間とは初期『カイエ』における探求の対象そのものともいえる。「心的な作業が認識されるのはただその変動によってのみである」(C.int., I, 129)、「思考とは時間それ自体である」(C.int., II, 72) というように、「心的変化の連続性」(C.int., IV, 39) すなわち「自家変動性」こそ意識の常態であり、内的事象の時間性は「システム」の第一原理とみなしうる。このように自家変動性を中心とする時間論が最初にまとまった形で展開されたのは、1899年5月『メルキュール・ド・フランス』誌に掲載された、論文「タイム・マシン」においてである(Æ II, 1456-1461)。ヴァレリーはここでH. G. ウェルズの有名な作品の書評の体裁を借りつつも、その実は『カイエ』の成果を全面的に展開し、「合理的・非合理的関係」などの概念とともに、矛盾率と結びついた時間論を提示する。初期断章の「矛盾率は時間の機能である」(C.int., I, 390)あるいは後年の「時間は矛盾を持ち運ぶ、すなわち「同一者」でないものの同一性を」(C, XV, 136)といった記述に見られるように、ヴァレリーは時間の特質をその内的矛盾ないし異質性として捉えていた。旧来の矛盾率は言語論理の地平から心的置換の地平へと換骨奪胎され、「非共存率」として彼の時間論の最初の鍵概念となる。「矛盾率は、いくつかの心的現象が同時に共存することの不可能を提示する」(C.int., I, 328)。要するにそれは思考内容の有限性と、「認識におけるいくつかの事象の共存不可能性」(C.int., II, 268)、換言すれば意識における「同時性」の不可能の謂であって、時間とは内面世界において異質な要素が共存するために必要な継起性かつ統一的秩序であるとされる。「“時間”とは継起する異なった現象の一致の要因である」(C, XVI, 262)。「時間とは万物のうちに探しもとめられ、予感される統一性、もしくは存在の多様性に与えられる名称であ

る」(C.int., II, 302; III, 520)。

だがそうした異質性が認識されるためには、事象の推移を辿り、比較対照可能とするような立地点がなければならない。かくして時間とは「同一の部分を持つ事象の差異」(C.int., II, 76)であり、意識において変化するものと固定保存されるものとのあいだの「異質な複数性」(C, XII, 67)にかかわる機能とされる。「時間が生じるのは、私が変化を辿るかわりに、それを自我から分離する、つまり変化を分割によって翻訳するときである。[……] 一般的にあらゆる変化は自我の分割を伴う。一部分は外的変化を補おうとするが、他の部分は不変のままとどまる<sup>3)</sup>。」一般的にはこの固定要素とは記憶にほかならない。「時間とは異なった事象を同一の事象と結合させることの可能性である。ここで同一な事象とは記憶であり、異なった事象とはなんらかの変容である」(C.int., IV, 172)。だが時にそれは意識の変遷における独立した観察者とみなされる。「時間が思考、すなわち内的言述の領野に介入してくるのは2度しかない。第1に感覚として。第2に、ある複合体の記述要素として。この複合体は常にひとりの観測者を含有している」(C, XV, 229)。

### 時間の幾何学

このように意識の置換を諸要素に分割し、「形式的」に探求することをヴァレリーは早くから「時間の幾何学」と呼んでいた。すなわち心的現象の全体的変化に含まれ、あるいは随伴するさまざまな機能-函数を弁別し、変合法則を表象、可視化することがこの「時間の幾何学」にほかならず、さらにそこにはさまざまなアナロジーが考慮されていた。「a 時間という語の用法に関し、幾何学のそれと類似した公理の体系を推論すること。b それに心的観察から得られ、蓋然的と見なされる諸関係を結び付けること」(C, X, 750)。

かくしてヴァレリーの時間についての考察は、当初から意識的、無意識的に直観への依拠と、時間の空間化の契機を伴っていた。「ひとが空間を扱ったように時間を扱わねばならない」(C.int., V, 140)。「時間は、それを考え

るとき、常に空間である。なぜなら、時間を考えるということは、変化を考えることだからである。変化とはある事象と、複数の別の事象との対照である」(C, XIV, 188)。「時間の問題は否応なしにひとつの継起を表象させる、そしていかなる継起も、2ないし3次元を有する多様性によってしか考えることができない、要素間の諸関係のひとつを含んでいる。これは空間化によって示されるものである」(C, XVI, 670)。

このような立場が、持続の空間的認識を峻拒したベルクソンのそれと異なることはいうまでもないだろう。実際ヴァレリーもベルクソンを意識した記述をたびたび行っており、たとえばある『カイエ』にはこう書かれる。「ひとは継起的に生成される事象を視覚化したり空間化することを批判する。だがそれなしにどうすればよいのか！」(C, XI, 696)。この時間の空間的分析への志向は、時間を電磁気論の「場」のモデルと結びつける試み(C, IX, 170-171)や、形象の変換とその連続性を探求する企てとしての「時間(の位相幾何学)」(C, XXI, 245)、「真の時間に対象を広げた一種の位置解析」(C, XII, 131)の野心(おそらくは企図のままに終わったものの)へとつながっていく。「意識——時間のトポロジー。観念や感覚の交差、重層する注意力、行為の過程——あたかも、一般的に波が交じり合うことなくお互いを横切るように」(C, XXVIII, 806)。

### 線的時間と注意力

ヴァレリーは統一秩序としての時間のうちに線の順序構造を認め、当初それを素朴に1次元の独立変数とみなしていた。「時間は1次元しかもたない」(C.int., II, 72)<sup>4)</sup>。「時間の変化は、ほとんどの事象における変化の唯一の場である。論理的作業の大部分が行わねばならないのは、種々の独立変数を確定し、時間をそのほかから識別し、そして[……]この時間がある展開とある別の展開との唯一の共通なるものであることを示す、ということである。[……]時間とは、真に独立した唯一の変数である」(C.int., I, 84-85)。このような線の順序構造に関しては、さまざまな角度からその後も幾度となく言及される。すなわち「量」として考えた場合、時間は「あらゆる変化によつ

て常に一様に増大する、唯一の、加算的な効果」(C, V, 388)<sup>5)</sup>であり、あるいは、認識上の要請として、「時間とは、知覚において必然的に線上に並ぶものである。時間は否応なく線的なものである——いくつかの知覚単位を一線に並べる、また並べざるをえぬ、必然性である。時間における秩序は線的な3重の関係である。An-1 An An+1- (置換)」(C, XI, 847)。

ヴァレリーが時間を直線にたとえる多くの場合、注意力への暗喩がそこに含まれている。1904年頃の『注意力に関する覚書』構想を契機として、ヴァレリーは生理学的用語を援用しつつ、さまざまな心的事象を心身協働作用として分析するようになるが、その一環として時間は事物の運動を把握するための注意力の機能に関係づけられる。「結局のところ時間とは注意力にほかならない」(C.int., VI, 140)。「時間とは要するに焦点合わせと<sup>アコモダシオン</sup>協働的調節機能<sup>コオルディナシオン</sup>にほかならない」(C.int., VII, 242)。「真の時間とは、注意力の相である——注意力つまり諸機能の依存する特定の様態によってのみ可能となる知覚である。このように解された注意力とは、部分的な自由のために知の全体的変化の領域を制限することである」(C, VII, 71)<sup>6)</sup>。

このようにヴァレリーが時間を注意力の「相」において論じる際、それはもっぱら知覚の様態としてである。「時間とはおそらく一般的に(知覚としては)、維持されたあるいは変形された適応の仕事の知覚である」(C.int., IX, 184)。だが、それは具体的な事象の知覚ではなく、事象の変動の知覚、あるいは推移する知覚自体に向けられたメタ的知覚といえる。「時間とは、知覚の変動の知覚である」(C.int., VII, 272)。「それ自体として観察される時、時間はおそらく知覚の一般的感覚ないし知覚の知覚とみなされるだろう」(C.int., VII, 327)。そのような知覚は、永続して意識されるわけではなく、注意力が一定時間しか続かない努力である以上、有限な持続でしかありえない。したがってヴァレリーにおいて時間が線的持続として認識される際、それはベルクソンの連続的持続とは異なり、複数の個別な持続としてである。「時間の普遍的連続体は存在しない。《知覚された》——連続性=持続は、知覚可能なものにすぎず——しかも——おそらくは作りごとにすぎない。連続=持続とは、人がある部分を固定するとき知覚するものである」(C, VIII,

787)。「私は「いくつもの持続」を語るだけで「一般的な持続」を語るのではない。なぜなら私は、一般的な持続の観察を確認することができず、いくつもの持続の孤立した観察を確認するだけだからだ」(C, XVIII, 901)<sup>7)</sup>。

### 循環的時間

だがいっぽうで、このような単線的な時間像と対立するような思索も、次第に数を増していく。「時間は1次元ではない(またいかなる次元にも属さない)」(C.int., IV, 295)。「時間-唯一の-連続した-独立変数は存在せず、観察しえない。[……][時間の線的構造にまつわる]ひとつの因習が存在し、その因習がさまざまな要素を、普遍的に有効であるような架空の(1次元の)体系に関連づけさせる」(C, XVI, 327)。

たしかにヴァレリーは、物理的時間の線形順序構造まで否定しているわけではない。けれども彼にとって重要なのはあくまで内的体験としての時間秩序であり、みずからの心的事象がどのように構成されているか、という観察である。そうした思索を深めつつ、彼は次第に「普遍的独立変数」としての線的時間像を離れ、複数の循環的な系を部分として有する時間像を採用することになる。「時間とは、開かれたあるいは閉じた、一連の循環である」(C.int., V, 97)。「真の時間とは相互性-往復運動-循環-交換-離隔である」(C, XVI, 249)。「時間の真の要素は往復運動である」(C, XVII, 16)。すなわち心的内実はある同じ状態への回帰によって特徴づけられており、時間の流れは無数の循環の連鎖<sup>シークル</sup>によって形成されている。記憶は過去の循環の再現であり、意識内で自動作用を促進する。「記憶とは既に閉じた循環の復元である」(C.int., V, 97)。

こうした循環的時間論の柱となるのは、ひとつには1900年以降ヴァレリーが傾倒した熱力学における「可逆性」の概念であり<sup>8)</sup>、もうひとつは、ほぼ同時期に反射論およびエネルギー論の独自な解釈のうえに組み立てられた「要求-応答」の理論である。両者はしばしば融合しながら時間モデルを形成していくが、それによれば時間とは外的刺激による内的変化と、それに続く反応との連続にほかならず、常に当初の平衡状態にもどろうとする往復運

動がその動力をなす。「時間、それは反射の連鎖であり、また心的反射の統一性である」(C.int., VI, 195)。「真の時間の仔細な分析。各瞬間に、ひとはあるいは要求であり、あるいは応答である。各瞬間に、意識はあるいは零であり、あるいは増大しつつあり(応答)、あるいは減少しつつある(要求)」(C.int., VII, 517)。

「要求-応答」理論に基づく時間論のなかで鍵概念となるのは、「予期」と「不意打ち」である。「予期」とは上位の我によってなされる機能であり、状況に対して配置すべき機構と、充当されるべきエネルギーを不断に準備しつづける。それは想像と記憶を使いながら潜在的な応答を用意することによって感覚に先んじ、現実の衝撃を減殺しようとする働きである。予期されたものは、観念として、限定された感覚として定位される。精神にとってそれは既知の事象となり、反復を免れる「得になった時間」となる。いっぽう「不意打ち」とは「だしぬけの外的変化による停止、中断」(C, III, 898)であり、予見が裏をかかれ、準備ができていないままに、意識が過去にまで遡行を余儀なくされる「損になった時間」である。要求-応答サイクルが瞬時に機能しないことで生じた間隙、<sup>エカール</sup>離隔であり、そこでは予期のために準備されていたエネルギーはただちに費消されてしまい、「即座のエネルギーの莫大な需要、不足」(C, VIII, 674)が発生する。状況に対応できず、みずからが振動するのを感じる「非同時態」(C, V, 214)の状態が現出し、それは一連の減衰振動を経て平静に戻る。現実には衝撃、無定形な「生のままの感覚」(C, V, 591)として受け止められ、自らの隠された部分を露呈する。

こうした「予期」「不意打ち」は、絶え間ない意識の往復運動の機能ないし機能不全として定義されるが、そうした往復運動が周期的に回帰する同一状態が、ヴァレリーにおける「現在」である。「ある基点への回帰がなければ現在には存在しない。再認すること——は現在にとって本質的である」(C, XVII, 23)。現在とは意識が身体を介し、周囲の状況と相互作用を及ぼしあいながら、それらの作用が安定し連続的平衡を保った状態であり、「あらゆる可能なものの中心点、自由に使用しうるもの自体のただ中に、位置しているという感覚」(C, IV, 761)を伴う待機状態である。「現在とは、刺激



の際限ない散乱と伝播に抵抗する力の体系なのだろう。それはある1点からある程度以上離れぬようにする拘束である」(C, VIII, 302)。ここで過去とはすなわち記憶であり基点への回帰を促進する機能であって、「現在の1特性」(C.int., VIII, 355)とされる。いっぽう未来は零から創られるのではなく、すでに可能なるものとして準備されているのであり、「持続しみずからを露呈していく隠された現在」(C, V, 466)として内包されている。かくして「時間すべては「現在」との関係において定義される」(C, VIII, 303)。「時間という名称は、現在のうちにありながら現在に対立するもの一切を要約し、あるいは包含している」(C, XII, 745)。「現在は時間の起源、その中心である」(C.int., IX, 190)。「各瞬間に、思考はそれ以外の時間すべてに触れ、暗示している。時間全体が脳の中に、——思考するシステムの中に潜在する」(C, IV, 75)。

したがって「現在」とは、過去・未来との関係性において順序構造に組み込まれるというより、それ自身が順序構造の埒外にあるような本質的、普遍的枠組みである。「考えるに現在とは恒常的で根本的な形式であり——その本質的特性は往復運動ないし循環のイメージによって表されるような形式である——ただしその特性は時間の外にある」(C, XVII, 26)。このような「形式」(C, XVII, 458)としての「現在」概念をしばしば彼はカントの時間概念に結びつけ、後者による純粹直観形式としての時間を「永遠の現在の特性」(C, XVI, 500)と断ずる<sup>9)</sup>。「私の考えでは、時間を感性と悟性の形式として語るカントは——実のところ現在しか——(その諸特性の一部しか)指し示していない」(C, XIV, 677)。さらにヴァレリーにおける「現在主義」(C, XVIII, 681)は抽象的思索にとどまらず、精神の倫理にかかわるものでもある。現在時を、潜在的、顕在的な心的現象のひしめく場、あらゆる可能的なものを中心点とみなしつつ、精神の待機状態として特権化する。あらゆる可能性を錯綜体としての潜勢態のうちに保持するというヴァレリーの自我論が、時間論においても核心をなしているといえる。

## 時間の相等性・リズム

「要求－応答」にかかわる問題のひとつに「時間の相等性」がある。そもそもこの問題意識はポアンカレの所説が発端にあると推測される。1898年に発表された論文「時間の計測」<sup>10)</sup>のなかでポアンカレは、同時性<sup>11)</sup>や時間の相等性に対する直観の不可能性を説く。彼によれば、そうした直観の不在を補っているのは、個々のケースに用いられる複数の規則であり、われわれは必要に応じてそれらを選択し、あるいは発明して対処しているのである。すなわちこれは彼の「コンヴァンションナリズム約束説」の、時間計測の問題への適用といえる。おそらくはこの論の影響下に出発しつつ、ヴァレリーは時間の相等性の直観を、みずからの感性論の枠組みにおいて考察しながら、単に知覚としてのみならず知覚と筋肉感覚の複合作用として分析する。「規則的間隔において打つこと。いかにしてそれが可能なか。なんらかの知覚機能を筋肉刺戟の機構に「結合」せずには、そうすることはできまい。行為あるいは感覚の規則性が、感覚器官あるいは筋肉のメカニズムに伝わる」(C, XV, 6)。このような規則的行為は「要求－応答」のサイクルを人為的につくりだすことで得られる。

時間相互の相等性は解決不可能の問題である。それでいてわれわれは、この相等性の概念を持つ。[……] 実際には、時間の相等性は、単に知覚としてばかりでなく行動の法則として、われわれの感覚能力にとって実在する。「同じ間隔において打て」という言葉の意味は、まったく明瞭だ。われわれはそれを実行することができる。しかもそれを「同じ間隔をおかずに打て」という反対の指示よりも、ずっと上手に実行することができる。

ある行為のメカニズムがひとたび完全に決定されると、このメカニズムの諸行為の相等性が通則となる。間隔の相等性に対する知覚が、現象を産み出す隠れたメカニズムの組み立てから結果することはありそうなことだし、産出を受容と同一視することがこの相等性の鍵である――

継起するすべての現象は、その列によって、私のうちに、ただひとつの同じ体系がそれらすべての現象を産み出すような、またそこではそれらの現象が「要求-応答」の役割を演ずるような、そうした漠然たる産出のメカニズムを組織する傾向がある。(C, VI, 589)

関連して『カイエ』では、しばしば「3つの打撃の問題」が考察される。これは「要求-応答」メカニズムが連鎖して規則性を作り出す基本単位であり、前二者の間隔の知覚が予期を形成し、第3の打撃がそれに対する反射的応答であるかのように生じる連鎖である。

### 3つの打撃音——

継起する出来事の間隔の、均等性の印象ないし感覚を創り出すには、少なくとも3つの出来事が必要である、——当然のことだ！——第3の出来事は他の2つの出来事の「積み重ね」によって創られる一種の要求に対する応答である。それぞれの打撃は異なった役割を演じる。あたかも最初の2つの組み合わせが、ある欲求ないし離隔を創り出しており、それを3つめが満たす——サイクルを閉じる——かのように。(C, XXII, 565)

継起する刺激によってもたらされる時間の規則性や間隔の記憶の同一性は、より一般的には「リズム」の問題系に属する。リズムとはすなわち持続のなかに法則化された間歇的機能であり統一性である。時間間隔の産出法則が開始時点に規定され、起点となる刺激=要求が与えられるや、一連の継起する行為とエネルギーの放出、変換がそれに応答する。それはただひとつの事象から帰結する継起的展開であり、全体の法則性は規定される諸関係に依存しつつ、部分に分割不可能である。「筋肉・感覚器官の相互的な結合」(C, XV, 7)によってエネルギーの使用は効率的に組織され、受容の法則が同時に産出の法則となる。「リズムは複数性の知覚とその再生産のあいだの依存関係である<sup>12)</sup>。」部分は全体と一体化し、「継起的なものが同時的なもの

特性のいくつかを帯びる」(C, V, 499)。それは行為による時間の構築であり、空間における「シンメトリー」と対比されるべき、時間の組織化である。「リズムは時間に対して、結晶が周囲にある無定形なものに対するのと同じ関係にある」(C, V, 906)。

### 長く感じられる時間・短かく感じられる時間

時間の直観に関連して、ヴァレリーはまた、しばしば心理的時間の長短についての考察を行っている。たとえば1900年の『カイエ』には、物理的に計測された一定の時間に対する心的変化の数の多少によって、時間の長短の印象が生まれるという分析が読まれる(C.int., III, 60)。いっぽう中後期には、「時間とは感性の産物である」(C, XXV, 387)との観点から、「要求－応答」モデルに則り、時間の心理的長短を倦怠や焦燥と結びつけて分析する。それによれば、時間が「短く感じられる」のは、もっぱらすでになしとげた仕事を振り返る場合(C, XII, 597)に生じる知覚である。その際仕事はあたかも「中断の性格を有」し、「予期が裏切られた」ように感じられる<sup>13)</sup>。また「エネルギーは完全に使用され、主体は[状況の]移り変わりにこれ以上長居する必要がない<sup>14)</sup>。」

それに対し、「長く感じられる」時間は、主として仕事を遂行している最中に生じる感覚であり、「エネルギーは不完全にしか使用されず、余分なエネルギーが自由な状態で、用途を定められずにいる<sup>15)</sup>」状態である。「時間が長く感じられるというのは、予期されている一定の変化——それが起こらないのだが——の圧力が増し——、この遅れのゆえに応答が得られなくなった要求が次第に阻害され——特殊化されたエネルギーが不足して、自由なエネルギーが過剰になっているという感覚である」(C, XVI, 804)。「多くの原因からわずかな効果が生じるとき、時間は長く感じられるものとなる」(C, XV, 831)。すなわち、長く感じられる時間とは、状況を変えるための努力や抵抗が予期した効果を示さない場合(C, XVI, 551)(C, XVII, 815)であり、「時間の尺度としての疲労の感覚」(C.int., IV, 146)を伴う。「長く感じられる時間とは、同一なるものの重みである」(C, XV, 526)。結局のところ

主観的時間が知覚されるのは、要求－応答サイクルが正常に作動していない場合であり、そのあいだに不均衡が生じている場合である。「時間そのものが知覚されるのは、何らかの不一致がある場合に限られる——待つとき－苦しむとき－急ぐとき－意思するとき。その場合、時間は応答を求める要求の緊張度のみ依存するひとつの大きさ、要求と応答のあいだにあるすべてのものによって膨れあがる、あるいは無によって膨れあがる、ひとつの大きさである」(C, IV, 73)。

### 時間論との対話

以上のごとくヴァレリーの時間論を通覧して理解されるのは、ヴァレリーが終始時間を心理的現象として扱ったということである。意識の置換の現われを「真の時間」とみなす立場は、もとより「システム」探求のなかで独自に培ったものに相違ないが、思想史的類縁を求めれば、古くはアウグスティヌスに遡る主観的時間観がここに認められる<sup>16)</sup>。すなわちそれは時間自体を問題にするのではなく、主体にとって時間がどのように体験されるか、ということのみ問題にする態度である。『カイエ』の考察は時にこの立場をかなり先鋭的に推し進め、ついには自然界の時間を捨象し、「時間は（生命のない、無機的な）自然のうちには存在しない」(C, XVI, 68)、「世界のうちには——事物のうちには、時間は存在しない」(C, XVII, 118)とまで極論するにいたる。そうした例は稀としても、彼のなかで生きられた時間と物理的時間とを区別する態度はほぼ一貫している。「時間をそのある場所」に探し観察しなければならない。力学や物理学のうちに時間を考察することは——“事物”と無縁な特性を、事物に付与することにすぎない——“記憶”、“予期”、感知しうる焦点合わせといった特性を [……]」(C, XVI, 687)。

ヴァレリーは『カイエ』において幾度も、世界そのものが時間構造をもつというニュートンの絶対時間を否定するが、そこには近現代におけるあらたな時空概念の影響を読み取ることができる。たとえば、ある断章には、「“時間と空間”は依存しあっている。それは1°近代の分析 2°物理学上の発見によるあらたな成果である」(C, XII, 351)と記されるが、こうした視点の淵

源は、最初にマッハ哲学、つづいてアインシュタインの理論に求めることができるだろう。1908年の『認識と誤謬』フランス語版出版当時よりヴァレリーが接していたと推測されるマッハ哲学において<sup>17)</sup>、時空の一元化は根本的な原理となっている。周知のようにマッハは、感性的現象の統一的記述を志向しつつ、現象だけを基盤に物理学を再構成しようと試み、ニュートン力学の絶対時空間の前提を批判した。この感覚一元論によれば、時間は感性的諸要素に依存した相対的・間接的關係にすぎず、空間的規定に還元しうるものとされる。アインシュタイン-ミンコフスキーの4次元連続体に連なるこの志向は、少なからずヴァレリーに影響を与え、「錯綜体」の概念にもその反響は認められる。

さらにアインシュタインの理論に関しては、その及ぼした知的刺激については認めながらも、おのれの時間論を物理的次元とは区別する立場が、『カイエ』のそこかしこで言明される。「私自身ノ時間論——あるいは私自身ノサマザマナ理論！ わが局地的時間。この、私のなかでは古くからある観念は、こんにちアインシュタインの諸理論によって呼び覚まされた。——それは「物理学的」観念ではない」(C, VII, 585)。とはいえ、ヴァレリーが同時代思想のなかでも相対性理論に特別な地位を与えていたことは疑うべくもなく、それは1920年代以降の彼の思想に対し、もっとも影響を与えた理論とって過言ではない。

ヴァレリーによる相対性理論の受容は1905年の特殊相対性理論発表からはかなり遅れ、1915年の一般相対性理論以後から言及が目立ち始める。『カイエ』において「相対性原理」への解釈を述べた例としては、以下のような断章が挙げられる。「相対性の観念とは、ある現象を表現する命題における主語と属詞を、また属詞と主語を交換することを可能にする観念である。AがBから遠ざかる = BがAから遠ざかる」(C, XI, 105)。「相対性。我と諸現象とは相互的であり、両者の区別ないし分離は、2極のあいだのそれにすぎない」(C, XIII, 176)。このようにヴァレリーは相対性原理を観測系相互のそれというより、観測者と観測対象、あるいは主体-客体との関係において解釈していたように思われる。アインシュタインの相対性原理においては、

観測者間の交替的扮技による相互主観的視座の獲得が哲学的に大きな意味を持つが<sup>18)</sup>、ヴァレリーにはそのような視点が乏しいことはまず目すべきだろう。さらにヴァレリーは特殊相対性理論のもうひとつの中心的原理である「光速度不変の原則」についても言及する。「物理学における時間とは空間と光との関係である」(C, XI, 679)。「相対性は時間を時計の現象に還元した——まったく独立した変数のかわりに、現象を観察する諸条件や相互関係に従うような。さらにこの時計は光であり——その周波数はさまざまな速度の構成に依存する、等等。」(C, XXIV, 427)。

いっぽう一般相対性理論がそのひとつの柱とするのは、「一般共変原理」、すなわち一般的自然法則はすべての時空座標系に対して成り立つ方程式によって表現されねばならないとする原理である。この原理は非ユークリッド4次元時空へのテンソル解析の適用により達成されるが、もはや体験の間主観的認識は問題にならず、4次元宇宙の超越的実在が問題となる。ここで時間は独立した存在ではなく、4次元時空の構成物であり、時空は物質分布に依存して成立する。これに対するヴァレリーの言及は「成分」としての時間論として幾度も示されている。「時間は、相対性理論では、もはや包含するものではなくて成分となる」(C, XVI, 512)。この見地からはすべての座標系は統一的に扱われ、時間を空間から分離し独立変数として扱うことはもはや不可能となる。「“一般相対性”とは次のように表現されうるだろう。「それ自体としての独立変数は存在しない。われわれのすべての計測、変数は互いに依存しあっている。」——そしていかなる計測システムも変化しうる、との仮説が立てられる」(C, XVIII, 698)。「相対性。以下が私の立言である。それ自体としての独立変数は存在しない。それらは各分析において採用されねばならない。いかなる孤立した変数も存在しない」(C, XV, 608)。

繰り返していえば、中後期ヴァレリーの時空論構築に対し相対性理論が大きく寄与したことは間違いない。だが、その受容が認識論レベルで、ヴァレリーの唯我論的発想を揺るがしたかどうかは疑問である。『カイエ』のある断章には、相対性理論に倣って、主体の内部・外部や身体的要素・心的要素を同時に収める視点を獲得すべき野心が綴られるが(C, X, 562)、そこには

みずからの視座を他者の視座と関係づけることにより相対化し、間主観化するという発想は現れない。むしろ頑ななエゴティズムによって、他者と視点を交換し、現実を共有することに、彼はあからさまな嫌悪を洩らしさえる(C, XIII, 759)。自己の内面を巨大な時空とみなし、その「システム」のなかにヴァレリーはさまざまな理論を貪欲に投影しつづけたが、その時空の外部に出ることは決してなかったのである。

以上見てきたように、ヴァレリーによる時間分析には、彼の生涯にわたる思索の変遷がそのまま映し出されている。初期の『カイエ』における意識の連結関係を数理的に分析する姿勢が、中後期における「要求-応答」モデルを中心とする分析に移行しつつ、次第に感性論的アプローチが比重を増していく。その過程で、循環の平衡点としての現在時優先主義が、反復を嫌悪し一切を先取しようとする精神の倫理として、強く浮かび上がってくる。そのいっぽうで、身体感覚を軸とする「生きられた時間」への考察も深められていく、というように、時間論は、ヴァレリー思想の全体的展開と軌を一にしているのである。それはまた現存在が否応なく投げ込まれた「絶対的な不可逆性」(C.int., II, 178)としての生の時間との闘いの歩みであり、記録でもあった。

#### 註

- 1) まとまった先行研究として挙げられるのは、ニコル・セレイレット＝ピエトリの歴史的研究書における分析をはじめ、以下の通り。
  - Nicole Celeyrette-Pietri, *Valéry et le Moi*, Klincksieck, 1979, pp.48-70, 114-115, 186-191.
  - Nicole Celeyrette, « Un état des idées sur le Temps », in *Bulletin des études valéryennes*, n°98/99, L'Harmattan, Université Paul Valéry – Montpellier, janvier 2005, pp.89-104.
  - Micheline Hontebeyrie, « Les « copies manuscrites » sur le Temps », *ibid.*, pp.75-87.
- 2) 『カイエ』と連動しつつそれを補完する覚書や手書き草稿は、CNRS (国立科学研究センター)における ITEM (草稿研究所) ヴアレリーグルー



プから近年重視されている。またヴァレリー自身あるいは秘書の手になるタイプ打ち草稿は、『カイエ』の再整理と体系化のための企てであり、CNRS版『カイエ』と多くは重複するが、細部の異同や独自の稿も散見される。フランス国立図書館所蔵の主な「時間」関連草稿は以下の通り。

- *Cahiers copies manuscrites, circa 1908, volume VI*, Nafr.19470, ff.145-307.
  - *Notes diverses après 1900, volume IV, Ensemble thématiques I*, Nafr.19121, ff.107-278 (ff. 107-148 : Dossier “surprise-attente.” Entre 1912-1915; ff.149-278 : Dossier “temps et rythme.” Entre 1911 et 1915, avec quelques notes plus tardives (ff. 276-278).
  - *Cahiers copies dactylographiées (par Valéry, sur son « Oliver », circa 1910), volume I, Temps*, Nafr. 19473, 113f.
  - *Cahiers copies dactylographiées (Nouvelle frappe due à Mme Julien Cain, circa 1930), volume I, Temps*, Nafr.19483, 147f.
  - *Cahiers copies dactylographiées (par le soin de secrétaires), Rubrique Temps, vol. I-XIX (1919-1943)*, Nafr.19617-19635.
- 3) *Cahiers copies manuscrites, circa 1908, volume VI*, f° 156.
  - 4) Cf. C.int., III, 75, 538; IV, 227 etc.
  - 5) 「あらゆる置換には、常に同一方向の、ある量の増大が対応する。もっとも一般的な加算的性格」 (*ibid.*, f°221)。
  - 6) Cf. 「時間の知覚は自由で全的な変化を犠牲にして行われる」 (*Notes diverses après 1900, volume IV*, f°153v°)。
  - 7) ヴァレリーの用語法のなかで持続とは「あるシステムのなかで変化するものと変化しないものの対比の大きさ」 (C, XXIX, 635)、すなわち変化に対する保存の抵抗感覚である。「持続とは努力の志向的な等価物である」 (C.int., V, 234)。「持続－変化に対する抵抗の強度」 (C, XV, 519)。「持続。持続は時間ではない——それは感覚である——抵抗の」(C, XXV, 363)。
  - 8) 熱力学から得られた「相」、「可逆性」といった概念および「カルノー原理」にかかわる時間観についてはニコル・セレイレット＝ピエトリの前掲書参照。Nicole Celeyrette-Pietri, *Valéry et le Moi*, pp.48-70, 114-115.
  - 9) このように、ヴァレリーはカントの時間論をみずからの「現在」にひきつけてしばしば理解する。研究者のあいだでは、ヴァレリーが自らの時間論を別人に先取りされたと感じたことによる1898年から1901年にかけての精神的危機 (C, IX, 44) を、カントの『純粹理性批判』における時間論と結びつけるのが定説になりつつある。ただそれが、ニコル・

セレイレットが言うように (Nicole Celeyrette, « Un état des idées sur le Temps », p.104)、時間論と矛盾率との類似にかかわるものかどうかは確証がない。いっぽうヴァレリーが時間を具体的な事象の知覚ではなく、事象の変動の知覚、あるいは推移する知覚自体に向けられた空虚な知覚であるとするとき、カント的な直観の純粹形式にかなり近いものを含意しているようにも思われる。「時間——非知覚の知覚」(C.int, VII, 222)。「時間とはさまざまな零の知覚(ないし存在)である」(C.int, VII, 397)。「時間とは知覚された零である」(C.int, VIII, 358)。

- 10) Henri Poincaré, « La mesure du temps » in *La valeur de la science*, Flammarion, 1970, pp.41-54 (再録、普及版。初出は *Revue de métaphysique et de morale*, 1898, pp.1-13)。
- 11) 「同時性」の直観可能性について、ヴァレリーは多くの場合「行為」の概念と結びつけて考察する。「いくつかの事象が同時に起こるといことは、すなわち、これらの事象のうえに一様に行使される、分割しえない行為が存在するということである」(*Notes diverses après 1900, volume IV*, p195)。
- 12) *Ibid.*, p 199.
- 13) *Notes diverses après 1900, volume IV*, p 219.
- 14) *Ibid.*, p232.
- 15) *Ibid.*
- 16) 聖アウグスティヌス『告白』第11巻参照。『カイエ』にはアウグスティヌスの時間論に触れた断章がいくつかある (C, XIII, 474 ; XVIII, 600)。さらに付け加えれば時間の現在主義もアウグスティヌスを嚆矢とし、彼は時間を3種類に分類しつつ、それぞれ過去の現在(記憶)、現在の現在(直感)、未来の現在(期待)と定義した(『告白』第11巻20章)。Cf. 中山康雄『時間論の構築』、勁草書房、2003、27-41頁。
- 17) ヴァレリーに対するマッハの著作の(推測される)影響と、それに由来する1908年の危機に関しては、以下参照。
  - Bernard Lacorre, « La catastrophe de 1908 », in *Bulletin des études valéryennes*, n°43, novembre 1986, pp.19-26.
  - Florence de Lussy, « La crise de 1908. Paul Valéry et Ernst Mach », in *Valéry le partage de midi « midi le juste »*, Acte du colloque international tenu au collège de France le 18 novembre 1995, textes réunis et présentés par Jean Hainaut, Honoré Champion, 1998, pp.91-107.
- 18) Cf. 廣松渉・勝森真、『相対性理論の哲学』、勁草書房、1986、69頁(廣松)、182-202頁(勝森)。